

## ブログ作文技術(5)

### 第4章 ひきつけた読者は逃がさない！(承前)

#### Q13 テンポのいい読みやすいテキストを書くには？

「流れるようなテキストって？」「すらすら読めるテキストはどうやって書けばよいの？」ここでは読み心地のいいテキストとはいったいどんなものか？ すいすい読めるテキストはどうすればかけるのか？ などについて考えていきます。あなたテキストを流れるような文章にする秘訣とは.....

#### (070) テキストのテンポが悪いと.....

##### テキストが川なら、読者は舟

テキストを川にたとえると、(012)で扱っていたのは急な滝を作ったり、なだらかな河原を作ったりする派手な行程。そしてここで紹介するのは淀みのない流れにする、地味ですが大切な行程です。テキストが川なら、読者は舟。川の流れが止まると、それと同時に読者の思考も止まります。

##### 心地のいいテキストを目指して

流れるような文章とは、読みやすい文章です。「わかりやすい」という要素ももちろん入ってくるでしょう。ここでは読者が読んでいて、心地のいいテキストということにします。

テンポが良く、読み心地のいいテキストは、読み始めた読者を最後まで引き留めてくれます。「読みにくい」というだけで逃げられたら、せっかくのあなたのテキストがもったいないですよ。

##### 流れるテキストを作る基本は.....

まず、読者の視点に立つのが基本スタンス。「どうすれば読みやすいのかな？」と考えながらあなたのテキストを編集してください。「どんなテキストが読みやすいんだろう？」と、あなたが読みやすいと感じたサイトを研究するのもいいですね。

##### まとめ

「すべてのテキスト作りは、読者の視点に立つことから！」

それでは具体的に読み心地をよくするための方法について述べていきましょう！

## (071) 改行で作る、インターネットの文章ならではのテンポ

「読者が見た瞬間に『読む気力』を吸い取ってしまう」  
文字が詰まりすぎているテキストには、そんな効果があります。書き手にとっては、いらぬことこの上なしの能力。そんな力は、早々に葬ってしまいましょう。

### 改行のススメ

このファイル「ブログ作文技術」の最初でもおすすすめしました。モニターで読む文を書く場合、注意しなければいけないのは「見た目」ですよね。読みやすくする工夫なんですが、インターネットの文章では「見やすくする工夫」という方向から、アプローチしていきます。

目にやさしいテキストを作った方が、読者は読んでくれます。そして、目にやさしくするため最も簡単で効果的な方法、それが「改行」です。

### 改行する位置

ヤタラメッタラ改行するのも考えもの。「。」ごとに改行する方がいますが、テキスト全体がまとまりのないものになってしまいます。改行位置については、自分のサイトに暗黙の規則(ルール)を設けるといいでしょう。つまり、自分の中で改行ルールを作るのです。基本は、「段落ごとに改行する」なんですがね.....

インターネット上のテキストでは、「段落の始めは一文字空ける」というような決まりはありません。だから、段落ごとにインデントを設ける必要性はないでしょう。しかし、テキストといえども、それは文章。文章であるかぎり段落の概念はあります。意味ごと形成された段落に基づいて改行すれば、読者にとって見やすく、そして読みやすいテキストができあがります。

(注)段落については(081)、(082)を参考にしてください。

### 改行ルールの作り方

「一文ごとに改行して、段落ごとに一行空ける.....」というように、文と段落を基にして規則を作ります。あなたの、あなただけの改行スタイルを作り、パソコン上の見やすさを工夫してください。作ったルールは、よほどのことがない限り、いつも守ってください。

### 改行で作る間(ま)

改行には、見やすくするという他にもう一つ、隠された能力があります。それは、「間」(ま)を作る作用です。

たまに人と会話をしていると、「間」だけで笑いをとってくれる人がいます。「間」だけでテキストを面白くするのはむずかしいのですが、間を作るとテキストのもつテンポを調整できます。また抑揚・メリハリをつけるのにも効果的。

たとえば、(065)読みどころを予告するとのコラボレーション。予告の後、多く改行を入れ、もったいぶってみたいります。みのもんたの、「ファイナルアンサー？」と「正解！」との「間」のような感じです。

「ここでは改行を多くしてみよう、ここは少なめだな」というように、改行の量を操作して「間」の使い手になってください！

## (072) 一文を短く

文の長短が読者に与えるイメージを(064)の表で紹介しました。そのイメージを利用して、長短を調節し作られた文。そうした文は、考えられた文なのですからいいと思います。しかし、何も考えずに長くなってしまった文は、

時として読者、そして書き手へ結果的に悪影響を及ぼします。

読者にとって、長い一文は読みづらいものです。「文字が詰まっていると読みにくい」同様、読者の「読む気力」を奪ってしまうでしょう。それは、「テキストを読んでもらう機会が少なくなる」ことにほかなりません。書き手にとって、とてもマイナスなことですね。

長い文は、それだけでむずかしいイメージがあります。たとえば、次のような文。

[BEFORE]

長い文がむずかしくなる原因は、主語と述語が離れてしまったり、主語と述語のペアがたくさんあってどれが本当の主語なのかわからなくなったり、単語にはいろいろな修飾語がついたりして文の構造が複雑になってしまう結果にあります。

長い文をわかりやすくするには、この原因をできるだけ少なくすればいいのですが、一文を短くする方が書く方にしても編集しやすく、読者にとってもよっぽどわかりやすくなってよいでしょう。

[AFTER]

長い文がむずかしくなるのは、次のような点に原因があります。

- ・ 主語と述語が離れてしまう
- ・ 主述のペアが多くできてしまい、どれがおおもとの主語なのかわからなくなる
- ・ 単語に修飾語がかかりすぎている

長い文でも、こういった原因を取り除くと確かにわかりやすくなります。しかし、短い文にはかきません。文が短くなった方が、読者はよりわかりやすい。また、書き手にしても短くする方が簡単ですね。

以上[BETORE]と[AFTER]を比較しますと、分ける工夫をするだけでもだいぶ読みやすく、そしてわかりやすくなっていますね。一文を短くすることで、スラスラ読める、そんなテンポのいいテキストを作りましょう。

(注) 主語述語については、(087)を参考にしてください。

## (073) 「です・ます」と「だ・である」のテンポ

テキストにおいて、読者へ与えるイメージを形づくる要因の一つ。それが「です・ます」調と「だ・である」調です。「です・ます」調が敬体、「だ・である」調が常体といわれています。

### 敬体と常体の使い分け

ここで少し、基本の使い分けについてふれておきましょう。一般的に敬体である「です・ます調」は、特定の人に書くときに使われます。たとえば、手紙などを書くときです。そして、常体「だ・である調」はもっと公的で、不特定の人に宛てて書くときに使われます。論文などを書くときですね。もちろんこれは、ただの基本。現に今、私は特定できないあなたに語りかけているのに、「です・ます調」を使っています。

### 「です・ます」のもつイメージと、そのテンポ

まず、敬体「です・ます調」について。敬体のもつイメージは、ズバリ「柔」。敬体をもちいると読者に対する敬意や、謙虚さを示すことができます。読者が、敬体で書かれた文章に抱くイメージも、自然とやわらかいものになります。敬体には丁寧さがあるんですね。この敬体のもつ「柔」イメージによって、「です・ます調」は「ゆるやかなテンポ」を作るのに適しているといえます。ゆるやかなテンポをテキストに与えたいなら、ぜひ敬体を使ってください。

### 「です・ます」の欠点

敬体は、「柔らかいがゆえに押しが少ない」のはいなめません。つまり、説得力に欠けてしまうのです。そして、1つの文がどうしても長くなってしまいう性質は、テキストを間延びさせがち。注意が必要な文体です。

### 「だ・である」のもつイメージと、そのテンポ

敬体が「柔」なら常体は「剛」。常体をもちいると、読者にそのテキストの力強さ、押しの強さを伝えることができます。断定している感じを与える常体には、説得力があるんですね。そして、文を短くすることができます。サクサクと切りすすんでいくイメージには、潔さがうかがえます。そんな「だ・である調」のもつテンポは「スピーディさ」。テンポが速いテキストを書きたいなら、常体が適しているでしょう。

### 「だ・である」の欠点

常体は、「剛」ゆえの欠点をもっています。それは、偉そうな印象を読者に与えてしまうこと。押しが強く断定的なことが、上からものをいわれているような感じを読者に与えてしまうんですね。ぶしつけで、傲慢な印象を与えかねない常体。気をつけましょう。

ですます『柔』	だである『剛』
おだやかなテンポ	スピーディなテンポ
やわらかい 丁寧 謙虚 テキストを長くできる 説得力がない(押しが弱い)	堅い 厳格 知的 テキストを短くできる 説得力がある(押しが強い)

## (074) 語尾を工夫する

### 「語尾」というポイント

テキストの読み心地をよくするために、知られているようで知られていない、そんなポイントがあります。それは「語尾」。文末に同じ表現が続いてしまうと、テンポが悪くなり、読み心地が悪くなってしまいます。では、実際に体感してもらいましょう。以下は、ある広場を思い浮かべ、その風景を全て現在形で描写した例。

[BEFORE]

学生たちが仲間を作り、楽しそうに会話を交わしている。その傍らで、ある者はブレイクダンスを独りで踊り、またある者は歌を独りで歌っている。ベンチで独り本を読んでいる人や、何かを独りで考えている者もいる。

こうして客観視していると、この広場は私に次のように訴えかけてくれる。「人は、それぞれ個々の人生を生きている。独りなのは、あなただけじゃない。」と語ってくれている。

私が輪の中に入っていけないのも、私の人生のように感じてきている。そして、ちよっぴり「ここに私がいることを誇示したい」、ブレイクダンスを踊っている人のように誇示したいと考え始めている。

ここでは、語尾が「～いる」の連続で、文章全体が単調な感じになってしまっています。読んでいてもテンポが悪いですね。[BEFORE]の最後の部分は少々強引ですが、目の前に広がる風景を現在形で描写すれば、多かれ少なかれ「～いる」の連続になりがち。では、修正してみましょう。

[AFTER]

学生たちが仲間を作り、楽しそうに会話を交わしている。その傍らで、ある者は独りでブレイクダンスを踊る。またある者は独りで歌を歌う。ベンチには、独り本を読む人。あそこの椅子では、独りで何かを考えてる人もいる。

こうして客観視していると、この広場は私に何かを訴えかけているようだ。「人は、それぞれ個々の人生を生きてるのさ。独りなのは、あなただけじゃないよ」と。

私が輪の中に入っていけないのも、私の生き方そのもののように感じてきている。ちょっぴり「ここに私がいることを誇示したい」、ブレイクダンスを踊っている人のように誇示したい。何だか踊り出したい気分だ。

## まとめ

同じ語尾を続けないのは、コラムの読み心地にとってとても大切なポイント。そして語尾は、あなたの工夫次第で何とでもなります。読み心地のいいテキストを作るため、ぜひ心がけてくださいね。

## (075) 体言止めで変化を出す

(例)

これを見るといつも思い出す。ハナが作った腕の噛み傷。あいつは天国でも元気に誰かの腕を噛んでんのかな。

### 「体言止め」とは

よく使われる文の終わりとして、「体言止め」があります。上の例文では、「ハナが作った腕の噛み傷」がそれ。

「体言止め」とは、文章の末尾を体言(名詞・代名詞)で結ぶことです。主語になれるような語句で終わること。つまり「名詞」「代名詞」で一文を終わることです。

### 「体言止め」で作るメリハリ

「体言止め」は、語尾の変化を出すという効果の他に、次のような2つの効果があります。

1つ目の効果は、周りの文との差別化。「体言止め」が使われた文は、他の文と比べ変化が出ます。変化を出すと生まれるメリハリが、その文を浮き彫りにして、文は読者の印象に残るでしょう。メリハリを作るのにも、体言止めは使えるんですね。

### 「体言止め」のテンポの速さが……

もう1つの効果は、臨場感や生々しさが作れること。「体言止め」は文を短くすることもあって、速いテンポをテキストに与えます。今ここで動いているような臨場感が生まれてくるんです。

(例)

・九回裏2-3。1点のピハインドを追うイーグルズ。二塁に逆転のランナーを置いて、バッターボックス代打の新谷。カウントツースリー、ピッチャー投げた。カキーン……

## 「体言止め」補足

特別とりあげませんでしたが、文を短くできるというのも注目できる点です。題名をつけるときなどに使えますよね。少ない文字数で、多くの内容を入れる必要があるときは、ぜひ使ってみてください。

## (076) 倒置で変化を出す

### 倒置と体言止め

「倒置」も語尾に変化を出すいい方法です。そして「体言止め」と同じように、他の文との差別化によって、好きなところを浮き彫りにできる効果があります。つまり、メリハリづけにも効果的。メリハリをつけるために使うときは、「使いすぎれば、他とのギャップがなくなってしまう」といった注意点を念頭に置いておきましょう。それでは、倒置の例文です。

(例) 俺が彼女のチョコを食べたい。      彼女のチョコを食べたい、俺が。

### 倒置の効能は諸刃の刃

ここで、注意してほしいことが1つあります。「倒置」が文に及ぼす効果ともいえるものなのですが、倒置によって「文の中でとくに強調される部分が出てくる」という点です。

例文で説明しましょう。倒置した文を見てください。明らかに「俺が」という部分にスポットライトが当てられています。この前後の文章で、彼女のチョコに、何かしらの競争される要素がほしいところ。

「倒置」によって強調される部分を書き手が認識していないと、テキストの流れに支障をきたします。しかし、逆に意識して使うと、読者を注目させたり、メリハリをつけたりするのに非常に効果的な技です。

### まとめ

「倒置」は、強調される部分を意識して、ここぞという場所で使いましょう。

## (077) 語順で変わる強調部分

前節(076)で「倒置によって、文中でとくに強調する部分が作成できる」と説明しました。倒置とまではいきませんが、語順を変えると、その文での強調部分が微妙に変わってきます。下の例を見てください。

(例)

私が貴女と初めて二人で映画を観たのは、2003年1月、『ボーン・アイデンティティ』でした。

私が貴女と初めて二人で映画を観たのは、『ボーン・アイデンティティ』、2003年1月のことでした。

この2つは強調されている部分が微妙に違います。上と下の例文を比べてみてください。上の文は、「『ボーン・アイデンティティ』を観たこと」が際立っています。また、これに対して下の文では「2003年1月に観たこと」が強調されています。これをふまえて、語順を変えて、初めて二人で観たことを強調してみてください。

答えは、

私は貴女と2003年1月に『ボーン・アイデンティティ』を、初めて二人で観ました。

このように、語順で強調する部分を少しずつ変えられます。几帳面に全文を考えることはありません。注目すべきは主題へ誘導していくための文のとき。ここで、主題への道を読者に「匂わせる」ことができるなら、語順操作があなたの技になります。

たまに語順の工夫も心がけてみてください。思わぬメリハリ、テンポが生まれるかもしれません。

## 補足

(076)と(077)、語順変化で読者に「次ぎを匂わせる技」でもあります。この点を利用して、読者を思うところへ誘導できれば、それを裏切ることも可能。(046)を参考にしてみてください。

## Q14 読みやすい、分かりやすいテーマを書くには？

～テーマを分かりやすくするために～

「どんなテーマを使うと分かりやすいの？」「どうやって書けば分かりやすいの？」

ここではどんなテーマが、また、どう書くと分かりやすいのか？ 分かりやすいテーマの考え方や書き方について説明します。テキストを分かりやすくするための基本スタンスを、あなたに！

### (078) 自分がよくわからない内容を書くと読者は大混乱？

#### 具体的な内容が理解しやすい

具体的な内容と、抽象的な内容と、どちらの方が読者にとってわかりやすいのでしょうか。答えは、当然、具体的な内容ですよね。

自分のまわりにある出来事に当てはてみると理解しやすくなります。つまり、読者にとって身近に感じられる...そんな内容で書かれていると具体的になって、文章がわかりやすくなるでしょう。

#### テキストが抽象的になってしまう原因？

逆に抽象的な文章はピンときません。そして、読者に「何が」をうったえかけるパワーも少なくなります。抽象的な文章を書いてしまう原因の1つに、「自分がわかっていない内容を、わかっているように書きたい」という書き手の意識がありますね。

自分がわかっていないことを書くと、どうしてもピンボケになったり、おおざっぱになったりします。できあがった文章自体がピンボケしているのに、読者がピンと来るはずはありません。

自分がわかっていることを書きましょう。これが、「わからない」と読者を不快にさせないための基本です。

#### わかっていないことは、わかっている範囲で.....

補足です。けっして「わかっていないことを、書いてはいけない！」といっているわけではありません。

もちろん、わかるまで勉強するに越したことはありません。何となくしかわかっていないものは、「わかっている範囲」で書くといいのです。また、わからないことなら「自分は知りません」と端的に書けばいいのです。ソクラテスの「私は知らないことを知っている」(でしたっけ？ 笑)ではないですが、知らないのなら、私はこのことを知らない！と書きましょう。

#### まとめ

テキスト作りにとって、「自分が知らないことを自覚している」といった「謙虚さ」がとても大切です。

## (079) また、わかっていることこそ丁寧に

### 誤解が起こるのは……

人と話をしている、お互いの勘違いで誤解を生んでしまった経験はありませんか？ つき合いが長ければ長いほど、こうした事態は起こりますよね。たいてい、共通認識だと思っていることを省略表現し、発言してしまうのが原因です。

つまり、自分が当たり前と思っていることを、当たり前のように伝えたところ、相手にとってそのことが当たり前ではなかったときに、誤解が発生します。わかりにくいので例です。(笑)

(例)

男「駅のキヨスク(西口)で待ち合わせな」

女「わかった！キヨスク(東口)ね」

といった具合です。前置きが長くなりました。

### 読者を不快にしかねない「当然」

こういった状況は文章でも発生します。読者にとって、説明不足で意味がわからない文章は、とても不快だったりしますね。たとえば、パソコン関係のマニュアル。カタカナの専門用語をみただけで頭が混乱するのに、使っている漢字まで、パソコンでしか使わないような使い方がされています。初心者ユーザーにとって、不快この上なし。こういった文章も、ある意味で、抽象的といえます。

こうした説明不足は、自分が当たり前だと思っている場合に、よく起こります。私たちは、自分が知っていることくらい、他人も知っていると思いがち。ですが、自分の当たり前と他人の当たり前なんて、一致しない場合の方が多いのです。ましてや、テキストはインターネットにのせる文章。不特定多数の人が読むのですから、丁寧な説明に越したことはありません。

### 注意！「いうまでもない」なら書かない

説明をつけるにしても、こういうつけ方はよくありません。「当然知っているだろうが」と感じさせるような説明文です。自分の知らないことを「当然知ってるだろ？」と書かれては、読者が腹立たしくなって当然。「あなたは、わかっているのかもしれないけど……」と、そのテキストにツッコミたくなります。たとえば次のような文。

(例)

- ・日本は 1973 年に 2 つの危機(いうまでもないが、石油危機とドルショック)を経験し……
- ・周知の事実、タバスコを日本に持ってきたのは、アントニオ猪木だが……

### まとめ

あなたがわかっている、または知っていることを書くときこそ、丁寧に書きましょう。丁寧がポイント。また、「当然だが」という感じが入ってはせっかくの説明が台無し。「当然」が入らない、丁寧な説明。それを心がけてみてください。その丁寧さは、きっと読者に伝わりますよ。

## (080) 抽象的なテーマを、具体的にする工夫は

抽象的なテーマを扱うときは.....

「抽象的な文章はわかりにくい」と説明しました。では、テーマ自体がむずかしいとき、抽象的な内容を書かざるをえないときや、テーマ自体がむずかしいときはどうしたらいいのでしょうか？

どうしても抽象的なことを書かなければいけないときは、その抽象的なものを、あなたにとって身近にあるモノに置き換えるのがいい方法です。

「自分に当てはめて書いていく」。こうすると、具体性が増します。欲をいえば、読者にとって身近にあるモノに置き換えるのが一番。しかし、なかなかそれはできません。まずは自分に当てはめて書いてみましょう。

### 自分に当てはめて書いていく2つの利点

具体例をあげる利点は2つあります。まず、ピンボケ文章のピントをあわすのに具体例こそ最適なのです。具体ほど、わかりやすいものはないですからね。

もう1つは、あなたの身近にあるモノに置き換えると、書いているあなた自身の考えを整理しやすくなります！やはり、抽象的なテーマとなると自分の頭の中ですら、あやふやになってしまいがち。具体的な例を使うと頭にある考えがまとまり、この結果書く内容もハッキリ見えてきます。

### 「自分に当てはめる」例

では、どんなふうに自分に当てはめるか、例をあげておきましょう。

(例)

- ・テーマ「許しのメカニズム」  
怒っていても甘いモノを与えられると、私はどうも相手を許してしまう。こんな私のように、「許し」というものは.....
- ・テーマ「酸性雨の危険性」  
私、髪が薄いんです。酸性雨がキツくなってくると、残された髪の毛のバリアなんて、相手がショットガンで、こっちが紙みたいなもんです。カミだけに.....
- ・テーマ「マウス、卵子のみでの出産実験成功について思うこと」  
結婚できない私が、知らない人に精子をもらわなくても出産できる..... もうそんな時代が近づいているみたいです。というも.....

といった具合です。

抽象的でわかりにくいテーマは、自分の身近なところから語りはじめ、具体的にしてから、書き進めていきましょう！！

## Q 15 読みやすくするために工夫するって？

～分かりやすくするために、こんな工夫～

「もっと分かりやすくしたい！」「むずかしく書かないためにどうしたら？」ここでは読者を不愉快にさせないテキスト作りについて考えましょう。無駄にむずかしくしないで、読者に優しいテキストを書くヒントをあなたへ。

## (081) 段落 1 つに内容 1 つ！

(071) で段落について少しふれました。  
さらにここでは、テキスト中の段落について述べていきたいと思います。

### 内容が盛りだくさんの段落は...

論文を読んでいると、「むずかしい..... わかりにくい.....」が日常です。もちろん、内容をむずかしく感じるのは、私の理解力・読解力のなさが手伝ってのことですが、それだけではないと思っています。書き手が段落 1 つに、内容をつめこみすぎるのです。

テキストに話を戻しましょう。繰り返しになりますが、テキストといえど、文章に変わりはありません。そこには、段落の概念が存在します。文を書くとき、ぜひ意識したい概念の一つが段落ですね。

では、段落とはいったいどういったものなのでしょうか？

### 段落とは「1 つの意味のかたまり」

「ある 1 つの意味について書かれた文」、「ある 1 つの事柄を説明する文」が集まって段落を作り出します。段落とは「1 つの意味のかたまり」。それなのに、段落の中へ 2 つ以上の意味をつめこんでは、読者が混乱するのも無理はありません。多くの内容が詰めこまれた段落は、わかりにくく、むずかしく感じるのですね。以下は、内容をつめこみすぎた段落の例。

#### [BEFORE]

今回のテーマは「段落においてわかりやすい文章を書くには？」です。段落というものは、1 つの意味のかたまり。この段落に注目して、文章のわかりやすさを追求することは、非常に意味があります。では、段落によって文章が分かりにくくなるのは、いったいどんな場合でしょうか？ 3 つあります。1 つ目のケースは.....

つめこみすぎたら、区切ってしまいましょう。上の文は、わかりにくい..... といいますが、読みづらいですね。1 つの段落に内容が盛り込まれすぎているのです。1 つの意味ごとに段落を作り、区切ってみましょう。区切るだけで、よみやすさは全くちがってきます。また、改行が多くなると、見た目も読みやすそうですね。

#### [AFTER]

今回のテーマは「段落においてわかりやすい文章を書くには？」です。

段落とは、1 つの意味のかたまり。この段落に注目して、文章のわかりやすさを追求することは、非常に意味があります。

では、段落によって文章がわかりにくくなるというのは、いったいどんな場合なのでしょう？ 3 つあります。

1 つ目のケースは.....

### まとめ

「段落 1 つに内容 1 つ」。多く盛り込みすぎ、大きくなった段落は、小さい段落に分けてしまいましょう。

## (082) 段落に「なにが書かれているのか」におわせる

### なんとなく分かっているだけで上がる理解度

TV ドラマの始めに、先週のストーリーと今週のさわりを少し見せる手法がありますよね。私にとってあれはとても助かります。先週からの流れが曖昧になってしまっていますから、「今どんな具合になっているのか」などといった状況の概略を知るだけで、話の理解度、物語への感情移入のしかたが変わってきます。

テキストを読む場合も同じです。「読んでいるところはなにについて書かれているのか？」をなんとなく分かっているのと、分かっていないのとでは理解度が違います。では、受ける側から、与える側に視点を移していきましょう。

### 「なにが書かれているか」をにおわせる 2 つの方法

「これからなにを書くか」を読者に「お知らせ・予告」するのは、テキストをわかりやすくする上でとても効果的な手法です。段落に「なにが書かれているのか」をにおわせるのです。内容ごとに分かれている段落に、その内容を予告する一文がそれぞれにあると、わかりやすくなること間違いなし！！ では、続いて、予告する方法、さわりを見せる方法についてふれていきたいと思います。

におわせる方法は 2 つ。1 つは、前の段落の最後に次の段落の予告を入れる方法。

- …… 続いて について考えていきましょう。
- …… 次に、事件が起こった状況についてふれていきたいと思う。
- …… では、いよいよ作り方に入っていきたいと思います。

段落の最後に、「続いて」や「次に」といった、つながる言葉を入れて、次の段落内容を予告します。

2 つ目は、段落冒頭でにおわせる方法です。

- そのとき、ありえないことが起こった。…
- 映画のストーリーなんですが、…
- 料理の作り方は…

段落冒頭の書き出しで、その段落についての「さわり」を入れます。

### 「さわり」は人のためならず！？

「さわりを見せる」のは、もちろん読者のためですが、自分のためでもあります。書き手に及ぼす利点は 3 つ。

1 つ目は、「段落の内容を 1 つにしぼれます」。予告を書くと、その段落に書く内容を束縛します。書き手を縛ると、段落で書く内容が 1 つにしぼられます。段落ごとに内容が 1 つだと、そのテキストはとてもわかりやすくなるはず。

2 つ目は、「段落で書く内容を確認できます」。書いている内容があっちこっちに飛んだりしないで、迷わずに書けるのではないのでしょうか。「さわり」が指針の役割を果たすんですね。

最後は、「読み直しのとき、話の流れをとらえやすくなります」。段落の前後にほどこされている「さわり」を確認すると、どんな流れでテキストを書いたか、簡単に見直せます。

一度で何度もおいしい「段落内容予告」。ぜひ、やってみてください。

(注) 予告については、以下もご覧ください。(046)「くいちがいでインパクト」、(065)「読みどころを予告する」

## (083) 難解な言葉は、無駄に文をむずかしくする

### 無駄にむずかしい言葉

インターネットをしているとき、ときどき出会うのは無駄にむずかしい言葉を使っているライターさん。書いている本人にとっては、当たり前という言葉なのかもしれませんが、多くの読者はそうは思いません。よほど文章内容に魅力がなければ、言葉の意味を調べるのが面倒になり、読むのを途中であきらめてサヨナラ！ 無駄にむずかしい言葉は、わかりやすい言葉に置換えた方が無難です。

(例)

- ・近年、自分の周りでも晩婚化が顕著に見受けられる。      最近自分のまわりでも、結婚の遅い人が多い。
- ・逐一、報告する。      1つ1つ、報告する。

### 使うにしても、漢字から意味を想像できる言葉を

たしかに漢字の方が、より言葉の意味・印象を鮮明につたえられる場合があります。しかし、「その漢字を読めて、さらに意味を読者が知っているとき」、または「漢字からその意味が想像できるとき」でなければ、使う意味はありません。

(例)

- ・合格への捷径。      合格への近道。
- ・多くのデータに基づいた、蓋然的な結論。      多くのデータに基づいた、ひじょうに確実と思われる結論。

### せめて、ターゲットにしている層の読者にわかる言葉で……

意識しないで、当たりまえだと思って使っている人もいますが、わざわざむずかしい言葉を使いたがる人もいます。間接的に「自分はこれだけの語句を知っているんだぞ」と自慢したい人たちですね。そういった人たちが、むずかしい言葉を使うことに慣れてしまい、常習犯と化してしまうと、もう目も当てられません。簡単な言葉でいえるところでも、わざわざむずかしい言葉にしてしまう。「読者にやさしいテキスト」とはほど遠くなります。

パリアフリーなテキストを目指しましょう。少なくとも、ターゲットにしている層の読者にとって、やさしいと感じられる文章を…… ね！

## (084) 使わなくてよい漢字

### まずは意識から……

「わざわざむずかしい言葉を使うな！」といってきました。しかし、そういう私も意識していなければ、いつの間にやらパソコンでむずかしい言葉に変換してしまっています。「むずかしい言葉はさける」という考え方。意識するのとしないのではまったく違ってきますよ。

### 熟語の動詞

それでは「どんな語句を無意識にってしまうのか」について2つ、具体的にみてみましょう。

1つ目は、「熟語を動詞として使った語句」です。確かに熟語動詞は、文字数を減らすのにとっても便利です。が、漢字を増やすと、見た目の印象がむずかしくなるのはさけられません。

(注) (066)「見た目から変える文章の雰囲気」を参照

では熟語動詞と、それを簡単な言葉に置換えた例をあげてみましょう。

(例)

- ・費用を削減する      費用をへらす
- ・人口が増加する      人口がふえる
- ・制限時間を延長する      制限時間をのばす

もちろん「絶対使ってはいけません！」というわけではありません。漢字をへらしたい場合には、積極的に熟語動詞をターゲットにしましょう。

### わざわざ漢字にしなくてよい語句

2つ目は、「変換しなくてよい漢字」です。キーボードから入力していると、自分の書けない語句まで漢字に変換してしまいます。さらには、漢字にすると読めないことばまで漢字に変換してしまう場合もしばしば。これは困りもの。

それでは、自分が書ける、書けないは別として、わざわざ漢字にする必要がないことばの例をあげてみます。

(例)

生憎(あいにく)、専ら(もっぱら)、丁度(ちょうど)、従って(したがって)、黒子(ほくら)、目脂(めやに)、欠伸(あくび)、黴(かび)、蒔蓄(うんちく)

「生憎」「専ら」「丁度」などといった副詞は、とくに漢字にする必要はありませんし、「従って」などの接続詞も同様です。副詞や接続詞はなるべく「かながき」するほうがやさしい文になります。読みにくい名詞、もともと漢字がむずかしい言葉は、漢字に変換しないでおきましょう。

また、下のような動詞も、漢字に変換しなくてもよいことばです。

(例)

- ・～して欲しい                      ～してほしい
- ・～減って来た                      ～減ってきた
- ・～出来ない                        ～できない
- ・～致します                         ～いたします
- ・～して下さい。                    ～してください

わかりやすい文章を書きたいのなら、選ぶことばも読者にやさしいことばを選びたいものですね。

## Q 16 言いたいことを、しっかり伝えるには？

～誤解をまねかない工夫はこうする～

「伝えたいことをしっかり読者に伝えたい!」「誤解されないためにはどうしたらいいの?」ここでは伝えたいように伝える、誤解させないための工夫を考えていきます。

誤解されないで、しっかり伝わるテキストを書くためのチェックポイントをあなたへ。

### (085) 誤解を避ける工夫、「句読点」「語順」「説明文」

自分の伝えたい内容が、相手にまちがって伝わるのはとても危険です。危険ではないとしても、多くの解釈を生んでしまうのでは、意味のわかりにくい文章になってしまいます。

誤解をさける工夫を、文章にほどこしましょう。

では、いったいどんな文章が誤解をまねくのでしょうか。つづいて、誤解を引き起こす文章例をあげてみましょう。

(例)

・彼の友人と私の浮気が彼にバレないようにする。

この文は2つの解釈が成り立ちます。

1. 私は彼の友人と浮気をしていて、彼にそのことをバレないように工夫している。
2. 私は誰かと浮気をしていて、彼の友人と共謀してバレないように工作している。

いかがですか？ 読者に誤解されないで伝えるには、どうすればいいでしょうか。

誤解をふせぐ方法は、いろいろありますが、句読点の位置をかながえるのが基本です。また、語順を変えるのもいい方法です。説明をしっかり入れて、誤解をふせいでいいですね。先ほどの例文を、1,2の意味通り、読者に伝えるため、下のようになおしました。

1. 彼の友人と私との浮気が、彼にバレないようにする。
2. 彼の友人と2人で、私の浮気が彼にバレないようにする。

句読点を打ったり、語順を変えたり、ときには説明文を入れたりして、読者に誤解されないように工夫しましょう。

## (086) 読点の打ち方の基本

(例)

・監督は髪を振り乱して演技する女優に指導した。

さてこの文章、髪を振り乱したのは監督でしょうか？ それとも女優でしょうか？ こういった文章は、読点を打つだけで、誤解をへらせます。

監督が振り乱しているなら、

・監督は髪を振り乱して、演技する女優に指導した。

また、女優が振り乱しているなら、

・監督は、髪を振り乱して演技する女優に指導した。

となります。

誤解を避けるためにも、文章をわかりやすくするためにも、読点は大切。ここでは、その基本について簡単に押さえておきましょう。

### 主語の後に打つ

長くなった主語の後には、読点をぜひ打った方がわかりやすいですね。短い主語の後ろには打たない方がよいでしょう。

(例)

・この後に起こった恐ろしい出来事は、まったくだれも予想できなかった。

### 文章が並立するとき、重文の後に打つ

(例)

・今のところ容態に変化はないが、油断は禁物だ。

### 条件をいったり、限定するときに打つ

(例)

・疲労が続くなら、休養を。

### 文章の始めが接続詞なら打つ

(例)

・また、誤解を招くときは.....

これらはあくまで基本。読点の打ち方に規則はありません。要は読者の視点に立って、誤読しないよう読点を打ちましょう。修飾語の多い文章は、とくに気をつけてください。

## (087) 否定文は誤解されやすい

### 日本語のむずかしいところ

「肯定か否定か、文末まで読まなければわからない」のが、日本語の特徴です。この特徴が原因で、否定文を肯定文に読みちがえる場合はしばしば..... とぼし読みをすると、とくに多くなりますね。

インターネットでテキストを読む場合、読者は文章を検索するように読んでいます。それはもう、とぼし読みの極致。そんな読者に誤解されないためにも、できるだけ肯定文で書いた方がいいのではないのでしょうか？

### とくに避けたい二重否定

否定文は否定文でも、その中でとくにわかりにくいのは二重否定。二重否定とは、次のような文です。

(例)

・否定文を使わなければ、誤解を生まない。

「ん？なに？」と、理解するにはもう一度読み直したくなる一文ですね。

こういった文章は、肯定文にした方が「よりわかりやすく」「より誤解されない」文章に変わります。例を、肯定文に変えてみましょう。

(例)

・否定文を使うと、誤解を生みます。

先ほどの文章と比べると、一目瞭然。肯定文の方が断然わかりやすいでしょう？

### 否定を使いたいときは.....

否定・二重否定を使うと、その文章の印象をより鮮明に伝えられる場合は確かにあります。そういった、どうしても否定文を使いたい場合は、次のような工夫で誤解をさけてください。

それは、「その文章が否定文だと推測できる言葉で始める」「この文章は否定ですよ」と、文章の冒頭で匂せるような語で始めるのですね。

(例)

・「けっして～ない。」「かならずしも～ない。」「とうてい～ない。」「いっこうに～ない。」

「けっして」や「かならずしも」といった言葉は、「～ない」という否定とセットになった言葉です。こういった言葉で文章を始めると、肯定文と否定文を取りちがえられる確率は減りますね。

### 注意・補足

注意があります。逆にこうしたセットになっている言葉を使うときは、かならずそのセットを崩さないようにしてください。

(例)

・けっして、わかりやすい文章を書ける。

これはおかしいですね。

(例)

・けっして、わかりにくい文章は書かない。

とするのですよね。否定文と肯定文の誤解をふせぐ工夫。ぜひ心がけてください。

セットの例

「けっして」「かならずしも」「とうてい」「いっこうに」「すこしも」	～ない
「たぶん」「おそらく」	～だろう
「なぜ」「どうして」	～か
「まるで」「ちょうど」	～のようだ

## (088) 主語と述語は対応させて、離さない！

### 扱いが悪いと主語がグレル……

「日本語は、あまり主語を重んじていない言語」と私は思っています。例外をのぞいて、述語は文末にちゃんと置かれますよね。でも、主語にいたっては、述語の前ならどこにおいてもいいですし、書かれない場合もあります。扱いがひどいですね。あまりにひどい扱いをしますと、主語はグレて、文章の意味がわかりにくくなってしまいます。

逆に、そんな主語の扱いをきちんとすると、とてもわかりやすいテキストができあがります。では、主語がグレないよう、きちんと扱う方法について、具体的にふれていきましょう。

### 主語と述語で気をつけたい2つのポイント

【BEFORE】

彼が、利用者が多少少なくなったところで、今でも公園は住民たちの憩いの場としての機能しているのに、それを潰してまで公民館を建てる利点も利益もないという理由から、公民館建設に反対であると抗議していると聞いた。一緒に抗議したかったが、周りに睨まれるのは自分だけで十分だと私を止めた。

主語と述語の1つ目のポイントは、「離さないこと」。長い文章になってくるにつれて、主語と述語が離れてしまう場合が多くなります。これは、読者を混乱させる1つの要因。簡単なことから、気をつけたいものです。

2つ目のポイントは「対応させる」。**[BEFORE]**の主語と述語を例に、説明していきたいと思います。

最初の文を見てください。省略されてはいますが、述語が「聞いた」となっていることから、主語は「私」です。それに対して二文目はどうでしょうか。「一緒に抗議したかった」のは「私」ですが、「私を止めた」のは「私」ではおかしいですね。ここは「彼」が止めたはず。これでは読者の混乱は当然。2つのポイントを元に、文章を書き直してみましょう。

**[AFTER]**

彼が、公民館建設について、次のように抗議していると私は聞いた。

「公園の利用者は減っている。しかし、公園は今でも住民達の憩いの場。それを潰してまで公民館を建てる利点も利益もない。」

私もいっしょに抗議したいと彼に告げると、周りに睨まれるのは自分だけで十分だと、彼は私を止めた。

## まとめ

省略するにしても主語と述語は、きちんと対応させましょう。そして、2つをできるだけ離さない！ 以上につきま

す。

## (089) 修飾するときの工夫

主語・述語の場合とおなじで、修飾する語とされる語を遠ざけると、読者の混乱が発生します。

(例)

・私の今親が持っている宝物.....

さて、この文をみてください。サラッと読みながしてしまうと、それまでですが、人によって解釈が変わってきます。解釈は2通りあります。

1. 「私の親がもっている宝物」という解釈
2. 「親がもっている、私の宝物」という解釈

「私の」が、どこにかかっていくのか明確でないのが原因です。ハッキリしないゆえに引き起こす誤解。さけないところですね。

こうした誤解をさけるための予防策として、「修飾する語とされる語を離さない」ようにしましょう。では、2通りの解釈が、わかりやすく伝わるように、例文を書き換えてみましょう。

1. 今、私の親がもっている宝物...
2. 今、親がもっている私の宝物...

読者に「この語が、なにを修飾してるのかわからない」と混乱させないよう、修飾語と修飾される語はできるだけ離さないようにしましょう！ ついでですが、いくつかの修飾語がつく場合、長い修飾語を先に書くようにしましょう。滑らかに読めるようになります。

## (090) 「しかし」を使いすぎない

**[BEFORE]**

「接続詞を多用するべからず」と、よくいわれる。しかし、全く使わないと、読みづらくなってしまう。なぜなら、接続詞は読者の思考をナビゲートするものだからだ。しかし、やはり使いすぎるのも考えもの。

とくに多用を注意したいのが「しかし」「ところが」といった逆接である。「しかし」を使うと、意見が180°回転

することあるごとに180°意見が変わっては読者が混乱するだけでなく、一貫しない意見は説得力を失ってしまう。しかし、全く使わないというのももったいない。なぜなら、「しかし」は読者に印象づけるのに、とても効果的な接続詞である。そのインパクトを利用しない手はない。ぜひ、ここぞというときに「しかし」を使いたいものだ。

【BEFORE】は、接続詞の量もさることながら、「しかし」が使われすぎです。【BEFORE】の書き手がいうとおり、「しかし」といった逆接は、180°意見を転換する方法。また、そうすることによって読者に強い印象をうえつける効果的な手段です。せっきくの有効な手段です。ここぞというとき、つまり【転】の前や、読者に注目してほしい部分で、より効果的に使いたいですね。

【AFTER】

「接続詞を多用するべからず」と、よくいわれる。まったく使わないと、読みづらくなってしまふ。なぜなら、接続詞は読者の思考をナビゲートするものだからだ。使いすぎず、使わなすぎない。接続詞は適度な使用を心がけたいものだ。

とくに多用を注意したいのが「しかし」「ところが」といった逆接。「しかし」を使うと意見が180°回転する。使いすぎると、ことあるごとに180°意見が変わってしまうことになり、読者が混乱してしまう。一貫しない意見は、説得力を失うことになるのだ。

しかし、まったく使わないというのももったいない。なぜなら、「しかし」は読者に印象づけるのに、とても効果的な接続詞である。そのインパクトを利用しない手はない。ぜひ、ここぞというときに「しかし」を使いたいものだ。

## まとめ

何気なく接続詞をつかった文章と、意識して接続詞をつかった文章とでは、質がぜんぜん違ってきます。接続詞は、そのときどきで、使うか使わないか意識してつかってみてください。とくに「しかし」といった逆接は、諸刃の刃。ここぞというときの「逆接」です！！

## (091) 「あの人が」と「あの人は」の使い分け

私たちが普段何気なく使っている言葉の中に、主語に続く助詞、【は】と【が】があります。この使い分けがなかなかむずかしい。これは【は】で、これが【が】となんとなくはわかるんですが、明確にその基準を説明できる人は少ないでしょう。基準をしっかりと、テキストを書くときの使い分けが非常に楽。ここでは、2つの基準についてふれていきたいと思います。

1つ目の基準として、「【は】は古い情報、【が】は新しい情報を伝える場合に使う」という原則があります。誰もが知っているようなことをいうときは【は】を使って、何か新しいことをいうときは【が】を使います。

(例)

- ・富士山は日本一高い山です。
- ・浅間山が噴火しました。
- ・阪神タイガースは1935年に誕生しました。
- ・楽天イーグルスが誕生しました。

もう1つの基準は、「【は】は述語に重点をおいた文、【が】は主語に重点をおいた文に使う」原則です。次の例文を見てください。

(例)

1. 学級委員長は増田だ。
2. 増田が学級委員長だ。

疑問文にして考えてみるとわかりやすいでしょう。

(例)

1. 学級委員長は『誰』ですか？
2. 『誰』が学級委員長ですか？

一番聞きたい『誰』という部分を、【は】では述部に、【が】では主部におきます。「『誰』は学級委員長ですか？」とはなりません。

【は】と【が】。この2つの基準をもとに、使い分けてみてください。変な混乱がさげられますよ！

## (092) 「れる・られる」はわかりにくい

### 受け身・自発で招く誤解

受け身・自発の「れる・られる」をつかって書いた文章と、能動態で普通に書いた文章、どちらの方がわかりやすいでしょうか。

答えは能動態で書いた文章です。

(例)

- ・(受動態)【受け身】で書かれた文章は、読者にわからせることがむずかしいと考えられる。
- ・(能動態)【受け身】で書いた文章は、読者にとってわかりにくいものだと考える。

「～れる」「～られる」という言い方は、【受け身・自発】の他に【可能】【尊敬】といった意味でもつかわれます。その上、主語(とくに私)をよく省略する日本語で、【受け身・自発】をつかうと、文章の主体が誰なのかわからなくなってしまう。「受け身・自発・可能・尊敬」だけでも複雑なのに、主体がわかりにくいという日本語の受け身・自発は、誤解を招きやすいんですね。

### 説得力が欠ける「れる・られる」

(例)

- ・(受動態・自発)

駄作だとされている映画は、ストーリーや内容といったものより、ただCGなどの見た目にこだわりすぎた点に問題があると考えられる。次回作が作られるなら、ぜひとも内容に凝ってほしいと思われる。

「～と考えられる」「～と思われる」といった自発の表現は、「～と考える」「～と思う」と比べ、説得力が落ちます。それは、主体である書き手の姿がぼやけてしまうから。書き手の『私』というものがぼやけると、主体が訴えかける力もぼやけます。つまり説得力が落ちてしまいます。

(例)

- ・(能動態)

世間が駄作とした映画は、ストーリーや内容といったものより、ただCGなどの見た目にこだわりすぎた点に問題があると考えられる。次回作を作るなら、監督にはぜひとも内容に凝ってほしいと思う。

「～れる」「～られる」を使うときは、気をつかいましょう！

## (093) 読み返す

誤解を防ぐ最も効果的な方法、それは「読み返す」です。

あなたはテキストを書き終わるまでに、何回読みなおしているのでしょうか？ どれくらい読み返しているのでしょうか？ 一文書くごとですか？ それとも一段落書くごとですか？

私の場合は、思考が止まったとき、読み返すようにしています。筆がのっているとき、ワザワザ筆をとめて読み返したくありません。一文書くごとに読み返す人も、全部書き終わってから読み返す人も、人それぞれのスタンスでいいと思います。重要なのは、読み返すこと。読み返しなくして、いいテキストは生まれません。

これだけはいえます。「読み返せば読み返すほど、貴女のコラムはよくなる」。書いている最中でも、書き終えた後の書きなおし段階でも、読み返すとそれだけ、よくなります。磨きに磨きをかさねて、あなたのテキストをすばらしいものにしてください。

(つづく)